

第 15 回(2013.07.01 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

南朝と北朝

受験などでよく勉強したものだから知ってはいたが、年齢を重ねるごとに忘れてしまうことが多い中の典型的なことが南北朝でしょう。もう一度簡単におさらいして思い出してみたいものです。

「南朝」とは、大覚寺統の第 96 代天皇である後醍醐(ごだいご)天皇(在位 1318～1339)から、第 99 代の後亀山天皇(在位 1383～1392)の時代をさします。

「北朝」とは、持明院統の光厳(こうごん)天皇(北朝第 1 代天皇、在位 1331～1336)、光明(こうみょう)天皇、崇光(すこう)天皇、後光厳天皇、後円融天皇(北朝第 5 代天皇、在位 1368～1392)の時代を言いますが、明治 44 年(1911)に南朝を正当としたため、現在の皇統譜(天皇の系図)では歴代天皇には数えませんが、しかし、南北朝時代以前も以後も北朝の系統が続いています。

寛元二年(1264)、第 88 代の後嵯峨天皇(在位 1242～1264)は、わずか在位 4 年で皇位を 4 歳の久仁親王(後深草天皇)に譲って院政を開始しましたが、天皇家は皇位継承権を巡って、後嵯峨天皇の子供である後深草天皇(第 89 代天皇)の持明院統と、同じく後嵯峨天皇の子供である亀山天皇(第 90 代天皇)の大覚寺統との間に分裂しました。この持明院統と大覚寺統というのは政務を執った場所にちなんで名づけられています。

この争いは、鎌倉幕府によって持明院統と大覚寺統が交互に皇位につくこと(両統迭立:りょうとうていりつ)になりましたが、後醍醐天皇(大覚寺統)は正慶 2 年(1333)鎌倉幕府への倒幕の綸旨(天皇の命令)を発して、天皇の独裁政治を行いました。このとき倒幕に貢献したのが足利高氏(あしかがのたかうじ)と新田義貞(にったのよしさだ)です。足利高氏はこの功によって尊氏の名前を貰い改名しましたが、その後、天皇政治から離反しました。

延元三年/暦応元年(1338)、足利尊氏は、天皇家に伝わる皇位継承の印である「三種の神器」を持明院統の光明天皇に渡し、征夷大將軍に任命されて室町幕府を開きました。この時、足利尊氏が持ち出した三種の神器は偽物だったため、後に問題を残しました。本物の三種の神器を持っていたとはいえ、兵力的にも財政的にも南朝(後醍醐天皇)の力は弱っていき、北朝の光明天皇の後には、北朝の崇光天皇、後光厳天皇、後円融天皇と続きました。これらのことは、南北朝争いとはいっても、実質的には南朝対足利幕府の戦いといっているでしょう。

明德 3 年/元中 9 年(1392)、三代將軍足利義満は、南朝の後亀山天皇に和睦を申し入れ、後小松天皇に三種の神器を渡したら、次は南朝側から天皇を出すという約束がなされました。こうして南北の統一が行われ、後小松天皇は第 100 代天皇となって、およそ 60 年にわたる南北間の争いに終止符を打ちました。しかし、後小松天皇の次には南朝側から天皇を出すという約束は守られず、結局北朝側の天皇が続くことになったのです。したがって現在の天皇は北朝の天皇なのです。

北面の武士と滝口の武士

中世の歴史本を読むと「北面の武士」とか「滝口の武士」などという言葉が出てきますが、詳しいことは知らない人が多いようです。「北面(ほくめん)の武士」とは、白河上皇(第72代天皇、1053～1129)が設置した、上皇(法皇)に仕え、身辺警護にあたった武士のことです。院の御所の北側に詰め所があったため、北面の武士と称されました。

「滝口の武士」とは、宇多(うだ)天皇(第59代天皇、在位887～897)が弓を射る優れた者を選んで、内裏の警護にあてたのが始まりです。御所の清涼殿の北側にある御溝水の落ちる滝口の近くに詰め所があったから滝口の武士と呼ばれました。

白河上皇は34歳のとき天皇になって、在位15年で8歳の堀河天皇に譲位して、上皇が政治を行いました。これを院政といいます。これが院政の始まりです。そこで、院を守る強力な武士が必要となり、北面の武士は近畿地方の武士の中から選ばれました。それまで儀礼的存在だった隨身(ずいじん＝護衛兵)に代わって、強力な武力を持った近衛軍団(天皇家を護衛する軍団)を形成しました。それが12世紀頃には正規軍より強大な軍団になりました。

鎌倉時代になり、後鳥羽上皇は北面の武士に加えて、院の西側に詰め所をおく「西面(さいめん)の武士」を創設しましたが、承久(じょうきゅう)3年(1221)鎌倉幕府に対して倒幕の兵を挙げた「承久の乱」で後鳥羽上皇側の敗北により、西面の武士は廃止されました。北面の武士はそのまま残りましたが、規模は縮小し、軍事的な面は無くなって、単なる御所の警備兵になり衰退していきました。しかし、その名称だけは明治維新まで続きました。

有名な平清盛の父である平忠盛(たいらのただもり)は、この北面の武士でした。忠盛は出世して莫大な富を築き、昇殿を許されるようになりましたが、これが平家台頭のきっかけとなったのです。また、歌人として有名な西行法師も北面の武士でした。俗名を佐藤義清(さとうののりきよ)といい、兵衛尉(ひょうえのじょう)という次官に任じられていましたが、23歳の時に出家しました。蹴鞠の名手でもあったとされていますが、一説には鳥羽天皇の中宮である待賢門院(たいけんもんいん)藤原璋子(ふじわらのしょうし)に想いを寄せたがために、その想いを打ち消すために出家したともいわれています。余談ですが、西行は俵藤太(たわらのとうた)藤原秀郷(ふじわらのひでさと)の系統で、れっきとした武門の家柄でした。秀郷から4代目の藤原公行(ふじわらのきみゆき)は、官職が佐渡守だったので、「佐渡の藤原」という意味で「佐藤」と名乗りました。西行はその公行の子孫です。

他方、滝口の武士は、時代によって若干違ってきますが、蔵人所(くろうどころ＝天皇家の家事をおこなう部署)に所属する10人から20人くらいで構成されていました。貴族の家人の中から弓射の試験に合格した優秀な源氏や平氏の強者が多く、天皇の警護や、病氣平癒祈願や入浴中あるいは皇子出産の際に、弓の弦を強く引き鳴らして邪気を払う「鳴弦(めいげん)の儀式」を行いました。この滝口の武士は、宿直の際には鳴弦の後、天皇に直接名乗りを上げる習慣があつて、宮殿に巣くう狐狸鳥獣や風雨による物音が、妖怪変化だと信じている迷信からの恐れや不安を、大きな声で力強くあげる名乗りや、鳴弦の音で解消してくれる大きな役割を果たしていました。

平将門も滝口の武士でしたが、滝口の武士で有名な者に斎藤時頼(さいとうのときより)がいます。時頼は、平重盛(たいらのしげもり＝平清盛の長男)に仕えていた武士で、重盛の推挙で滝口の武士となりました。清盛が催した花見の宴で、建礼門院(重盛の妹)に仕えていた横笛の舞を見て一目惚れしました。無骨な時頼がようやくの思いで恋文をしたため、なんとか相手に通じたのですが、父親から反対されて、わずか19歳で出家しました。一方、横笛は自分の気持ちを持ち滝口入道に知らせるべく、探し歩いてようやく時頼のいる寺にたどり着くのですが、時頼は修行の妨げとなると言って会わない。そして、これ以上訪ねて来られてはいけないといって、「女人禁制」の高野山静浄院へ移ったため、横笛は悲しみのあまり大堰川に身を投げたという悲しい話が『平家物語』にあります。明治の文豪高山樗牛が書いた『滝口入道』で有名にもなり

ました。

また、西行法師についても、いくつかの勅撰和歌集や私撰和歌集に載る歌を読んだ立派な人だという評価もありますが、出家する際にすがりつく妻や4歳になる我が子を縁側から蹴落として出ていったという話もあります。「坊主は衆生を助けるのが仕事ではないか、自分でちょっかい出しておきながら、女性一人を助けることもできないのか、あまりにも身勝手だ」と怒る人もいますが、とにかく男女の問題は古今東西複雑怪奇で身勝手なものです。西行法師も滝口入道も男女間の問題で出家しました。現在ではそういう理由でお坊さんになる若者がいるのでしょうか。もしそうなら、恋愛自由な現在だから、日本中お坊さんだらけになってしまう。笑いごとではありません。私のような年金生活でその日暮らしの老人は早く死んでもらわないと坊さんの生活が成り立たなくなります。

(篠井純四郎)